

いま ここで 【高学年 4 - (3)】

- より生活に身近な資料を用いた指導 -

- (1) 主題名 正しいことを [4 - (3)] 関連項目 [2 - (3)]
- (2) ねらい だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努めようとする心情を育てる。
- (3) 資料名 「いま ここで」
- (4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点
導 入	1 自分の経験を思い出し、「不公平」について考える。	今まで、だれかが不公平にされているのを見たり、自分も不公平な扱いを受けたりしたことがありますか。 ・自分だけ注意されていやだった。 ・不公平にされている人がかわいそうだった。	不公平な行為が、受けた人や見ている人の心を傷つけるということについて関心が高まっていくようにする。
展 開	2 資料「いま ここで」を読んで話し合う。 3 自分の生活を振り返る。	たけしに注意できなかった正男の気持ちを考えてみましょう。 ・たけし君、そんな悪いことをしてよくないよ。つとむ君がかわいそう。 ・注意しようかな。でも聞いてくれるかな。 ・注意したらぼくもきられるかな。 正男の強い思いとは、どんな思いだったのだろう。 ・悪いのは、たけし君のほうだよ。 ・たけし君、もういいかげんにしようよ。 ・洋子だって勇気を出して言っているのだから、ぼくも今言わないと。 正男のように悩んで、言えなかったり、勇気を出して言ってよかったと思ったことはありませんか。 ・正男君の気持ちもよくわかる。 ・きられると思って注意できなかったけど、これからは勇気を出して言う。 ・人に迷惑のかかる悪いことはやめる。	友だちであるたけしを心配する気持ち、言い出す勇気を出せない様子、つとむを思う気持ちなど正男の心の葛藤を板書に整理する。 洋子の言動を見て気付いた、正しいことを言う勇気の大切さについても考える。 自分の経験を書かせ、注意することの不安感の中で、正しい行動をとることの大切さについて考える。
終 末	4 教師の説話を聞く。	・差別はいけない。だれに対してもやさしい気持ちで接していくことが大切なんだな。	だれに対しても公正、公平にした人の話を紹介し、公正公平な社会を願い、実践していく気持ちを高める。

いま いじで

「正男、パス。」

「よし。シュートだ。」

正男とたけしの二人の楽しみは休憩時間のバスケットボール。小さいころから家も近くいっしょに遊んでいた二人でしたが、六年生になって同じクラスになってますます仲良くなってきました。少しはずかしがりやの正男でしたが、自分の思っていることをはっきり言い、とても活発なたけしと遊んでいると元気がでてきてとても楽しくなるのです。

一学期の中ごろです。明るい面もあるたけしですが、六年生になって転校してきたつとむ君という男の子を仲間はずれにしたり、悪口を言ったりするようになりました。正男は、そんなたけしをよくは思いませんでした。しかし、注意することもできませんでした。そんなある日。正男は友だちの洋子によびとめられました。

「正男君、たけし君のことだけど・・・。」

正男は、びくつとしました。

「正男君、たけし君がつとむ君にひどいことをしていることをどう思っているの。」
洋子は、たけしと同様、正男にとっては幼なじみで、たけしのことを心配していたのでした。

「それは、よくないと思うよ。でも・・・。」

「わたし、やつぱり、このままではよくないと思う。わたし、たけし君に話してみる。正男君もいっしょに行こう。」

「たけし君、ちよつといい。」

学校の帰り道、たけしが一人で帰っているところを呼び止めました。

「あなたがつとむ君にしていること、わたしは許せないわ。正男君もそう思うでしょ。」

洋子が顔を真っ赤にして言いました。正男は一瞬たけしの顔をうかがいましたが、たけしは顔をそむけたり、ふくれつづらをしたりして、素直に聞いているようには思えませんでした。それを見た正男の心に強い思いがこみ上げてきました。

（いま ここで言わなければ・・・。）

正男は、体をふるわせながら言いました。

「たけし君、つとむ君がこのままじゃかわいそうだよ。」

正男にはそれがせいっぱいの言葉でした。

たけしもそんな正男をじっと見つめていました。

次の日の朝、正男が学校へ行く途中のことでした。

「正男君、待ってよ。」

後ろからたけしが追いかけてきました。

「正男君、きのうは、ありがと。つとむ君にはあやまるよ。」

「うん。」

一緒に並んで学校へ向かう二人を後押しするように、さわやかな朝の風が気持ちよくふいていきました。

活用に生かすための実践報告

「いま ここで」

1 主題の設定

正・不正を見極め、だれに対してもわけへだてのない平等な行動をとることは、互いに信頼しあえる人間関係を培っていくための基本である。しかし、わたしたちの身の回りには差別的な事象がときどきみられ、民主的なよりよい社会の実現までには至っていない。子どもたちも公正・公平な態度の大切さはよくわかっているが、好き嫌いの感情や目先の利害にとらわれ、差別をしたり、偏見をもったりすることが実際にはみられる。また、最近では不正・不公平の現実に出くわしても、自分が「仲間はずれ」になるのをおそれるあまり、見て見ぬふりをしたり、時には、一緒になって行動してしまったりする子どももいる。しかし、人間尊重の精神から考えても、差別や偏見は人を傷つけ、人間が人間らしく生きる権利を否定するものであり容認できるものではない。お互いの人間性を認め合い、信念に基づき、だれに対しても公平・公正に接する態度を身に付けることが大切だと考え、この主題を設定した。

この資料は、友だちに注意することをためらった正男が洋子の正義感に揺り動かされ、勇気をもって訴えるという話である。子どもたちの生活にとっても身近な困難な問題でもあるが、公正・公平にふるまうことは大変な勇気があることであり、その勇気が人間には必要であることをしっかり考えさせたい。

2 指導過程の工夫

子どもたちはわけへだてなく平等に接してほしいという願いをもっている。導入では、「不公平」な扱いを受けたときの気持ち、その場面に直面したとき、心の中にわいてくる公正・公平な気持ちについて感じ取らせたい。

板書には登場人物の表情の絵をはり、視覚的にも気持ちを考えやすいようにし、正男の心の変化の様子についてとらえさせていきたい。

展開後段では時間を十分にとって自分を振

り返らせ、今日の学習をこれからの生活に生かしていこうとする気持ちが表れている児童数名の作文を読み、共に学び合いたい。

3 発問の工夫

中心的な発問では体をふるわせながら訴えた正男の態度や表情も考えさせ、洋子と共に勇気を出して正しいことをしようとした正男の気持ちに共感させたい。

終末の教師の説話では、だれに対しても公正・公平にした人の話をし、差別や偏見のない社会の実現を願う気持ちを高めたい。

4 児童の反応（自分の生活を振り返っての児童の発言から）

・わたしも正男のように友だちが悪いことをしていても何も言えず、ただ見ていることしかできませんでした。この話を聞いて「やめたほうがいいよ。」と言えるように勇気を出して言える自分になっていきたいです。

・やっぱり一人で言うのは勇気がいると思う。正男にとって洋子のように、自分も友だち何人かで言ったとき、あやまってくれたことがある。

・正男はとなりに洋子がいたから言えたんじゃないくて自分の意志で注意したからえらいと思う。たけしも正男を仲間はずれにしなかったからえらいと思う。

5 実践者からの一言

高学年にもなると親しい友だち同士のやりとりが多くなり、またそれは、問題の引き金になる場合もある。学級の子どもたちと心を通わせる方法として、休憩時間に遊んだり、話をしたり、また日記指導も行っているが、心の悩みを聞く機会は少ない。本時は子どもの心を知る貴重な手がかりになった。この学習で子どもたちはこれからの生活に向けての一人一人の強い気持ちを語ってくれたように思う。その気持ちを受け止め、今後の生活に生かしていく支援が教師には必要なことだと思う。

（温品小学校 原 義喜）